

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 27 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520430

研究課題名（和文） 談話的観点からのフランス語時制の研究

研究課題名（英文） Study of the tense system of French from the viewpoint of discourse

研究代表者

東郷 雄二 (TOGO YUJI)

京都大学大学院・人間・環境学研究科・教授

研究者番号：10135486

研究成果の概要（和文）： 時制は単文でなく談話レベルで分析されるべきであるとの認識に基づいて、フランス語の時制がどのような体系をなしているかを考究した。フランス語の時制は発話時現在 t0 を中心とする時制群と、過去の時点 t1 を中心とする時制群とに二分される。未来は独立の領域を形成しない。この二つの領域がどのように発動されるかによって時制は機能する。また時制の解釈には視点が重要な役割を果たすことも明らかにした。

研究成果の概要（英文）： We investigated how tenses of French form a system with the assumption that tenses must be analyzed not within a single sentence, but at discourse level. French tenses are divided into two groups : those which take the speech time (t0) as center and those which take a past time (t1) as center. Note that the future doesn't form an independent domain. Tenses of French work on how these two domains are activated. We also showed that viewpoint plays an important role in the interpretation of tenses.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1500,000	450,000	1950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：仏語学

1. 研究開始当初の背景

時制論は伝統的にフランス語学の得意とする研究テーマであるが、伝統文法においては個々の時制の用法を細かく記述するのが主流であり、時制全体のメカニズムを俯瞰するような研究は少なかった。また時制は単文において考察されることが多いが、実際にはより大きな談話あるいはテキストというレベルで働く。本プロジェクトではこのような時制の伝統的研究の欠点を補うべく、談話と

いう観点からの時制研究を目ざした。この背景は、申請者が長年研究して来た指示と照応を統御する心的モデルという仮説がある。申請者は心的モデルの考え方が時制にも応用できるのではないかという推測を持ち、研究を開始した。

基本的アイデアは、時制を論じる際に語られる現在・過去・未来という時間区分は便宜的なフィクションであり、過去は記憶の中に、未来は予測の中にしか存在せず、すべては現

在に身を置く話し手の情報管理の問題に帰着するというものである。本研究ではこのように、時制を考えるときに談話情報の帰属という概念を重視した。

2. 研究の目的

本研究の一番大きな目的は、従来ばらばらに研究されて来たフランス語の時制をひとつの体系として把握することにある。フランス語の時制は、形態的には単純時制と複合時制の整然としたペアを成しているが、それはあくまで形態レベルの話であり、時間軸上に出来事を定位する意味レベルでは、それとは異なった体系を成している。この体系については過去に Co Vet らが断片的に提案したものがあがるが、時制研究においてそれほど注目されて来たとは言いがたい。

また伝統文法においては、時制は単文の例を基にして研究されており、談話レベルを考慮に入れた研究は、Kamp & Rohrer の“Tense in text”を除いてはあまり見られない。このため時制の意味の考究が断片的なものに留まり、実際の談話の流れの中で時制がどのように働くかという観点に欠けていた。

本研究はこのような認識に基づいて、まず時制をひとつの体系として把握し、談話レベルでどのように働くかを考究することを目的とした。

また本研究は実時間としての過去・未来の存在を否定する立場に立ち、すべては話し手による談話情報の管理と更新の問題帰着すると考える。今回の一連の研究ではそこまで十分に示すことはできなかったが、一部はこの考え方を組み込んだ成果があった。

3. 研究の方法

(1) まず実際の時制の用例を収集することから始めたが、この作業に当たっては、「談話ジャンル」を考慮することが必要だと認識から出発した。従来の時制研究では、用例のほとんどは小説などの書き言葉から収集されている。しかし、申請者は過去の指示詞研究において、話し手と聞き手のいるコミュニケーション的談話と、小説や新聞記事などの聞き手のいない談話とでは、指示詞の振る舞いが異なることを確認していた。このちがいは Benveniste がかつて提唱した、話 (discours) と物語 (récit) のちがいにほぼ対応する。話のレベルにおいては、話し手と聞き手を表す記号と、発話時・発話現場をさす記号が出現するが、物語のレベルでは、その純粹形においては、話し手・聞き手は不在であり、発話時・発話現場をさす記号も現れない。このちがいはフランス語時制全体を視野に収めたモデル作りに決定的な影響を与える。本研究ではまずこの点に留意した。

(2) 次に理論面においては、Kamp & Rohrer

“Tense in text”で展開された、後の談話表示理論につながる分析に大きな示唆を得ている。この論文は半過去の照応的性格を初めて提唱したものとしてよく知られているが、そのような分析は時制を単文ではなく談話レベルで考察することで初めて得られるものである。またこの論文では、時制の意味解釈において、談話の進展と共に移動する視点という概念が用いられている。この概念は時制を談話レベルで分析するには不可欠の概念であり、本プロジェクトにおいても、この視点という概念を重視した。

(3) 理論面でもうひとつ重要なのはメンタル・スペース理論である。Fauconnier によって開発されたこの理論は、Cutrer によって時制研究に応用され大きな成果を上げた。本研究は Cutrer 流のメンタル・スペースをそのまま取り入れたものではないが、参考にしている。Cutrer の研究では時制論に付きものの時間軸が見られないことが極めて示唆的である。Cutrer は時制の意味解釈とはつまるところ多重スペースの構築に他ならないと考えており、この考え方は本プロジェクトの方向づけに大きな影響を与えた。

4. 研究成果

(1) 申請者はすでに過去に発表した論文において (東郷雄二「Je t'attendais. 型半過去再考」『フランス語学研究』41号、2007)、フランス語の時制はふたつのグループに分かれることを明らかにしている。発話時現在 t_0 を中心とする zone 1 に属するのは、現在・複合過去・単純未来・前未来で、過去時 t_1 を中心とする zone 2 に属するのは、半過去・大過去・過去未来 (条件法現在)・過去前未来 (条件法過去) である。ただし、zone 1 に属する複合過去は現在完了的価値を持つ場合であり、単純過去の代用として用いられた場合はこの限りではない。また、直説法のうち単純過去・前過去はこの図式には入らない絶対的時制である。ちなみにこの図式は、『プログレッシブ仏和辞典』(小学館)の半過去の解説に取り入れられている。

(2) 本プロジェクトにおいて申請者は、日本語学におけるいわゆる「ムードのタ」や、金水敏 (大阪大学) の提唱する「出来事的テンス」「情動的テンス」の区別を参考にして、時制は時間軸上における出来事の分布を表すだけではなく、話し手による談話情報の保持状態を表しているという仮説から出発した。小説・歴史・弔辞などで用いられる単純過去は、出来事情報を「知識」として表現する時制であり、単純過去は保持された談話情報の全体性を前提とする。これは従来言われている「現在とは切り離された過去を表す」という単純過去の特性と矛盾するものではなく、むしろそれを補強するものである。単

純過去で表現された命題情報は、語り手の知識ベースに保管されており、特定の視点に依存しない。単純過去は視点フリーの時制であり、このためにふたつの zone の図式には入らないのである。

(3) 一方、半過去はより複雑な様相を呈する。申請者は Vogeleer にならって、知覚的半過去と認識的半過去を区別する必要があることを示した（後者はさらに単純型と包括型にわかれるがここでは触れない）。知覚的半過去は、*Marie entra dans le salon. Paul lisait le journal.* 「マリーは居間に入って行った。ポールが新聞を読んでいた」のように、特定の人物（この文ではマリー）の視点から知覚された出来事を表す。この場合、視点の過去時点 t_1 への移動がある。一方、認識的半過去は、*Il était une fois un prince malheureux.* 「昔々あるところに不幸せな王子様がいました」のような知識表現であり、視点の過去時点への移動を伴わない。

(4) また東郷 (2012) では次の点を論じた。フランス語の時制を zone 1 の時制と zone 2 の時制にグループ分けする利点のひとつは、従属節における時制の一致現象を極めてシンプルに説明できることにある。主節が現在から過去に変化したとき、従属節の現在は半過去に、複合過去は大過去に、単純未来は過去未来に、前未来は過去前未来に変化するが、この変化は t_0 を中心とする視点から t_1 を中心とする視点への全体的移行の結果であり、個々の時制がばらばらに変化しているわけではない。このように考えることで、従属節の半過去が時制の一致を起こさないことが説明できる。ちなみに従属節の単純過去も一致を起こさないが、これは単純過去がふたつの zone からなる図式に入らないことによって説明することができる。

この点で注目されるのは、従来、同時性を表さない半過去があることが指摘されてきたことである。教科書的には、*Marie entra dans le salon. Paul lisait le journal.* 「マリーは居間に入って行った。ポールが新聞を読んでいた」のように半過去は同時性を表すとされている。この文では *entra* の時点が *lisait* の時間インターバルに含まれる。ところが Sten や Le Bidois らは、*Et cette femme, en qui on ne pouvait reconnaître celle qui une heure auparavant pleurait avec Mahaut d'Orgel.* 「一時間前にはマオー・ドルジェルと泣いていたとはとても思えないこの女」のような例を挙げて、同時性は半過去の本質ではないと論じた。確かにこの例では *peurait* よりも *pleurait* の方が一時間前を表しており、同時性は成り立たない。

申請者はこの一見矛盾すると見える半過去の用法も、ふたつの zone からなる時制図式を適用することで解決できることを示し

た。鍵は *discours* の半過去と *récit* の半過去という二つのタイプを認めることにある。*discours* の半過去では話し手は発話時 t_0 に視点を置いて過去の事態を眺める。このため zone 1 と zone 2 の両方が発動され、多く現在と過去とを対比する場合に用いられる。一方 *récit* の半過去では zone 1 は背景化され、zone 2 のみが発動される。現在は忘れられて、視点は過去の時点 t_1 に移動する。これが教科書的な *Marie entra dans le salon. Paul lisait le journal.* 「マリーは居間に入って行った。ポールが新聞を読んでいた」のケースである。つまり視点が過去に移動する半過去と移動しない半過去とを認めるわけである。このように考えることで、Sten や Le Bidois らが同時性に対する反例として出した例文をうまく説明することができる。彼らの提示した例文はすべて次のようなパターンを示す。*Il n'était plus le garçon qu'il était trois mois auparavant.* 「彼はもはや3ヶ月前の少年ではなかった」このうち一つ目の *était* は *récit* の半過去で視点は過去の時点 t_1 に移動しているが、二つ目の *était* は *discours* の半過去であり、過去の時点 t_1 に視点を置いたままそれより過去を振り返っていると考えられる。つまりこれは「*récit* に埋め込まれた *discours* の半過去」である。文体の基調はあくまで *récit* なのだが、途中で登場人物（あるいは語り手）が過去を回顧する時に *discours* の発話態度が現れると考えられる。ただし、この用法はもっぱら比較節や関係節に見られ、*un jour ... le lendemain, maintenant ... autrefois* のように、ふたつの半過去の時間的懸隔を示す副詞が必要である。

(5) *récit* に埋め込まれた *discours* の半過去にはもうひとつのタイプがある。よく知られている *Jean se mit en route dans sa nouvelle Mercedes. Il attrapa une contravention. Il roulait trop vite.* 「ジャンは新しいメルセデスに乗って走り出した。彼は交通違反切符を切られてしまった。スピードを出しすぎたのだ」という Berthonneau & Kleiber の有名な例である。この例をめぐっては半過去 *roulait* が何と同時なのかという点が議論を呼んだ。*se mit* と同時だとする研究者もおり、Berthonneau & Kleiber 自身は *attrapa* が表す状況と同時的だとした。

しばしば「説明の半過去」と呼ばれるこのタイプの半過去について、申請者はこれもまた *récit* に埋め込まれた *discours* の半過去であるという分析を示した。この分析によれば、そもそも半過去 *roulait* は何とも同時的ではない。

(6) もうひとつの同時性を表さない半過去は、*Jean tourna l'interrupteur. La lumière éblouissante l'éblouissait.* 「ジャンはスイッチをひねった。まばゆい光が彼の目をくらませ

た」という Kamp & Rohrer の有名な例である。この例については、状態変化動詞である *tourner* の実現によって、新たな状態である「灯りがついた状態」S1 が現出し、半過去 *éblouissait* は S1 と同時であるという Kamp & Rohrer の分析が基本的に正しく、彼らの説に反対するために提出された反例は、物語空間内に設定された視点主体の有無によって説明できることを示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

(1) 東郷雄二、時制と談話構造 - 同時性を表さない半過去再考、フランス語学研究、査読有、46 号、2012、51-67

(2) 東郷雄二、談話情報管理から見た時制 - 単純過去と半過去、フランス語学研究、査読有、44 号、2010、15-32

[学会発表] (計 2 件)

(1) 東郷雄二、時制と談話構造 - 同時性を表さない半過去再考、日本フランス語学会例会、2011 年 4 月 23 日、東京大学

[その他]

ホームページ等

<http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/togo.htm>
1

6. 研究組織

(1) 研究代表者

東郷 雄二 (TOGO YUJI)

京都大学大学院人間・環境学研究科・教授

研究者番号：10135486

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：